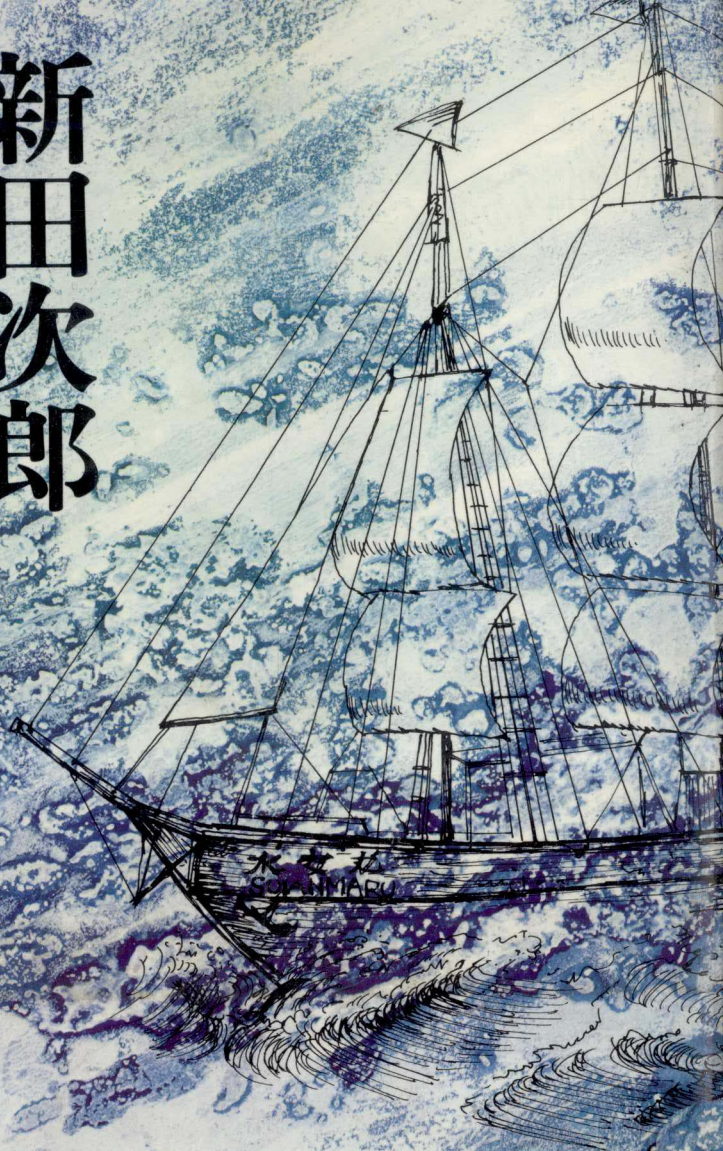
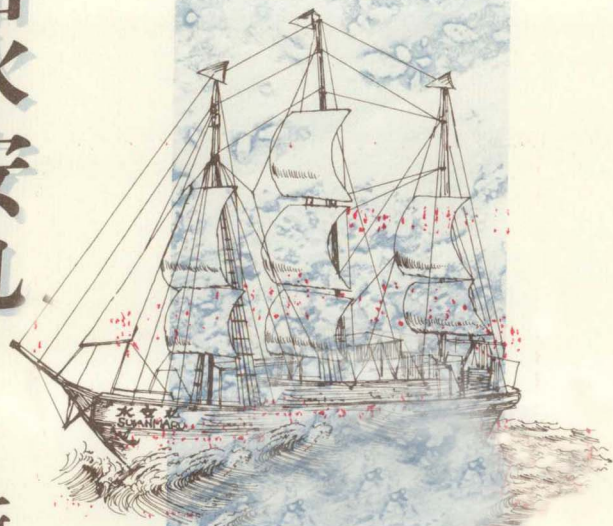


新田次郎
密航船水安丸



密航船水安丸

新田次郎



講談社

密航船水安丸

著者 新田次郎（にったじろう）

定価 九八〇円

昭和五十四年九月十二日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一一一
電話（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替東京八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

©新田次郎 Jiro Nitta 昭和五十四年 Printed in Japan
乱丁本、落丁本はお取り替えます。

目次

第一章	金の馬	5
第二章	フレーザー河	73
第三章	密航船	129
第四章	ロング・ナイフ	215
終章	広淵沼	279
取材記・黄金色のカナダ		311

装丁
熊谷博人

密航船水安丸

第一章 金 の 馬

村人の響どよめきの中から起った一段と高い女の悲鳴が、街道をねり歩いてた人々の足を止めた。彼等はいっせいにその方へ目をやった。馬頭觀音堂の春の大祭を祝う幟旗のぼりが狭い一本道に溢あふれていた。その群衆のずっと先のほうにふくれ上ったような人の節ふしが見えた。悲鳴はそこら辺りから聞えて来たのである。

「馬だ、あばれ馬だ」

と二階で見ていた一人が大声を上げた。

人々はその声を聞くと、それぞれ自分の逃げ場を探して走った。小道や民家の軒下に多くは身を避けようとした。幼い子供を連れている親たちの狼狽うろたがいっせいに立ち昇った白いほこりの中で一層の混乱を招いた。

及川甚三郎おがわじんざぶろうは街道に出たところだった。あばれ馬と聞いたから、そっちへ目をやった。栗毛のたくましい馬の鬣たがひが波打っていて、その目が異様に光っているのを見たとき甚三郎は、さかりがついた雄馬の暴走だなと思った。米川村よしかわむら（宮城県登米郡）鱒淵ますぶちの馬頭觀音堂では毎年旧暦の三月十九日に、大祭が行われた。この古刹こくわは大同二年（八〇七年）に開山されて以来、馬の信仰霊場として広く名を知られ、東北地方はもとより、関東あたりからも馬を曳いて、この大祭に参加する者が多かった。

人出はおよそ二万、馬五千頭と云われたほどの賑にぎわいであつた。民家は一時的に民宿となり、馬宿と

もなつた。馬屋が臨時に設けられ、祈禱太鼓の音が三日間は鳴り響いていた。

毎年この祭りには馬の暴走があつて、怪我人が出た。人が死ぬこともあつたが、むしろそれほどの賑いであることを、村人たちは誇りとしていた。云わば馬の暴走は当り前のことであり、そのような余興がないと祭りとは云えなかつたのである。

甚三郎は民家の軒下に立っていた。祭日だったから人々は着流しに草履をはいていた。道を歩いている人たちが一斉に彼が立っているところへ避難した。

手綱を曳きずつたまま走つて来る暴れ馬の姿が急に大きくなつた。鞍をつけてはいなかつた。

「危い」

という悲鳴が甚三郎の右隣りで起つた。左から走つて来る馬を見ていた甚三郎がそつちを見ると、彼の傍にいた、六、七歳の男の子が突然、道路に走り出たところであつた。道路を直角に横断しようというのではなく、道路を斜めに横切つて、走ろうとしていた。そこに母の姿を発見したからであつた。そのまま子供が走れば、うしろから暴走して来る馬の蹄にかけられる可能性が充分にあつた。馬は人を踏まないものだと言われていた。よけて通るか、飛び越すものとされていたが、必ずしもそうとは限らなかつた。避ける余裕があればそうもしようが、時間や距離的に余裕のない場合は事故になつた。道は狭くて避ける場所はないし、相手は暴走馬だつた。

斜め向うから、わが子を抱き取ろうと手をさし延べながら道路に出て来た蒼白な顔をした女性がいる。甚三郎はその顔をちらつと見た瞬間心を決めた。彼は道路の中央に跳り出た。

甚三郎が両手をひろげて馬にかまえたとき、暴走馬との間隔は三メートルほどあつた。馬は突然前にはだかつた人間に驚いたのか無意識に後足立ちとなつた。避ける余裕はなく、跳躍するには間合いがなかつた。人々は固唾を呑んだ。多くの人は、その無鉄砲な男が頭を蹴られるか、胸を蹴られてそこに倒れるだろうと思つた。あまりの恐しさに、顔を覆つた女性もいた。

甚三郎は暴走馬が、突然前に現われた人間にいきさかたじろぐ姿勢を見せた瞬間、大手をひろげて仁王立ちになっていた体を、斜めに開き、走って来る馬の首にいきなり飛びついた。栗毛の鬣が高く波打ち、馬は嘶いた。

甚三郎は馬の首にしがみついた。彼の着物の前がはだけて、白い股引きが見えた。馬はその甚三郎を引き摺ったまま十数メートルも走ったところで暴走をあきらめた。どう、どうと馬をなだめる声が甚三郎の口から続けて洩れていた。甚三郎が馬から離れたときにはちゃんと手綱を取っていた。

甚三郎は馬の気を静めるために、馬の首を撫でたり叩いたりしながら更に二十メートルほど行つた。馬はやや落着いたようであつたが、取られた手綱を振り切ろうとするようにしきりに首を振っていた。

「誰か水を持って来てくれ」

甚三郎は怒鳴った。彼と馬との取り合いを終始眺めていた人たちは、ほっとしたような顔をしたが、拍手したり、見事なものよと声を掛ける者はいなかった。心にそう思つていても、表情にはめつたのことでは出さないこの地方の人々は、それでも、水を持って来てくれという甚三郎の言葉で救われたように、近くの民家に走った。

一度に三つも四つも水を汲み入れた桶が運ばれ、飼葉桶がそこに並んだ。甚三郎の草履を拾って来た者もいた。馬は飼葉桶には目をくれず、しきりに水を飲んでゐた。彼は片手ではだけた着物の前を合わせながら一息ついた。妙な静けさがしばらく続き、鐘が鳴った。

馬が水を飲んでゐる家の庭の桜が満開だった。風が吹くと、その花びらが、水桶に散った。近くの掛け茶屋や、見せ物小屋から客を呼ぶ声が聞えて来る。祈禱太鼓の音が鳴り出し、絵馬売り店のあたりで馬の嘶きがすると、それに呼応するように、あちこちで馬の嘶きが始つた。いままで水を飲んでいた馬が顔を上げた。

「たいへんなお世話をお掛け申しました。おかげ様で、怪我人もなくほんとうにありがとうございます」

暴走馬の飼い主が来て、甚三郎にお礼を云ってから、馬に向つて、

「暴れるんじやあねえ、そのうち、よい娘を見つけてやるからな」

と人に話しかけるように云つたので、周囲の人たちがどっと笑つた。飼い主が手綱を持つと、馬は安心したのかやさしい目になった。

「せがれの危いところをお助けいただいて、ほんとうにありがとうございました」

甚三郎が馬の飼い主から目を離れたとき、彼の前に廻つて丁寧な頭を下げた男がいた。

「いや、なに、通りがかりのことです……」

と甚三郎はそう云いながら相手の顔を見た。

「あなたは、たしか狼河原の後藤吉治さん……」

「鱒淵の製糸工場の及川甚三郎さん……」

二人はほとんど同時に相手の名前を云つた。

鱒淵村と狼河原村が合併して米川村になったのはつい最近のこと、古くは鱒淵村、狼河原村と隣接してゐながら独立していた。両村併せて、五百戸余の小村であり、およそ半里（二キロ）ほどは離れていた。

及川甚三郎が鱒淵村に宮城県で最初という製糸工場を作つたのは明治十九年（一八八六年）であつた。その後ドイツ製のボーラーを入れ、現在は百五十人取りの工場になつてゐた。後藤吉治が及川甚三郎を知つたのは、彼が鱒淵製糸株式会社の株主の一人であり、何回も工場を見に行つたことがあつたからである。そして甚三郎が、工場を見学に来た多くの株主の中で、特に吉治のことを覚えてゐたのは、彼が適切な質問をする熱心な株主だったからであつた。

二人は顔を見合せて笑った。

「私の家はすぐそこですからどうぞ」

そう云って誘う吉治に甚三郎はことわる術も無くついに行った。観音堂の祭りは村を挙げてのものであり、通りがかって呼び止められたら、上って御馳走になるのがこの村の習慣になっていた。

「馬を押えて下さった、及川甚三郎さんだ。さあ金平、挨拶をしなさい」

吉治があがりがちまで出迎えに出た金平に云った。金平は黙って頭を下げた。目が大きくて、可愛らしい少年だった。

「幾つかね」

と甚三郎が訊くと、金平は、七歳ですとはっきり答えて、甚三郎の顔をじつと見つめていた。金平が母の腕の中に飛びこんだのと、馬が彼の背後を駆け抜けるのと同時だったから、彼は甚三郎と馬との間にどんな活劇が演ぜられたかは知らなかった。周囲で見ていた大人たちから、甚三郎が捨身で暴走馬の首にしがみついて取り静めたという話を聞いただけだった。

「お祭りとなると、毎年一人や二人の怪我人が出る。一昨年は死人も出た」

困ったものだと甚三郎は云わずに、吉治がさしだした盃を受けながら、吉治がどう結ぶか待っていた。

「まあ、馬のお祭りですからしょうがないようなことですが、これから先、馬の時代がどのくらい続くものでしょうかね」

吉治が云った。

「そうだ。汽車が通るようになってから、馬の数もぐんと減ったし、川を蒸気船が走るようになってまた減った。アメリカでは自動車というものを馬のかわりに使うようになっていそうだ」

甚三郎は彼が知っていることをあれこれ話していた。

米川村附近で及川甚三郎の名を知らぬ者はなかった。及川甚三郎というよりも及甚おいじんの名で知られていた。ただの及甚ではなく、製糸工場の及甚さん、水屋の及甚さん、川運送の及甚さん、などという呼名もあった。水屋というのは天然水をたくわえて仙台へ送り出す仕事をしたからであり、川運送の及甚さんというのは、北上川を利用して、川舟で木炭を石巻まで輸送したからであった。これはすべて職業と彼とを結びつけた名前であったが、新しがり屋の及甚さんという、いささか風刺ふうし的な渾名あだなもあった。兎に角、新しい物に着目することの早い彼に對しての評価はまちまちであった。

「自動車っていうのは、機械で走る馬車のことですかね」

吉治は甚三郎が後を続けないので、こちらから話を持ち出した。

「そうだ機械で走る……」

機械で走る馬車と云おうとして、甚三郎は笑い出した。吉治もすぐそれに気がついて笑ったあとで云った。

「そうそう錦織にしきおり村に二、三年前カナダへ行った佐藤惣右衛門さんという方がいて、その人から手紙が来ましたよ、……その手紙の中に面白いことが書いてありました」

錦織は鱒淵の隣村だった。

「面白いことと云うと、その自動車のことかね」

「それが河のことなんです。なんでも彼の手紙によると、カナダには北上川の十倍ほどの河があつて、秋になると、その河の色が真赤になるほど鮭が登つて来るのだそうです」

「河が鮭で赤くなる？」

「つまり赤い肌色をした鮭がひしめき合つて登つて来るのだそうです。それを掬すくい上げて、罐詰かんけつにして売るのだそうですが、向うの人たちは鮭の筋子すじこ（卵）が嫌いで全部河に捨ててしまうという話です。惣右衛門さんの手紙にはもったいないことと書いてありました」

鮭の筋子を食べないで捨てるのか、と甚三郎は云った。北海道産の筋子は正月近くになると、かなり高い値で売買されていた。その貴重食糧品の筋子が、河に捨てられているということが甚三郎には強い響きとなって聞えた。

甚三郎の目の前には北上川を十倍にした大河が浮び上った。そこにひしめく赤い鮭の群が見える。

（おそらくその鮭は、カナダ人の漁師によって捕られているのだろうが、その人たちが捨てる筋子はただ腐敗にまかせているだけである。もし、俺が行って、その筋子を日本へ送り出したら……）

彼の想像力は海を越えて、遠くカナダへ飛び、その利益は計りしれないものがあるに違いないとさえ考えた。

「どうかありませんか」

吉治は突然黙りこんだ甚三郎のきびしい顔を見て云った。その顔は、遠くを見つめている顔だった。なにかに対して真剣に怒っている顔のようにも思われた。佐藤惣右衛門の話を聞いて、及川甚三郎の心の中に確かになにかが起ったのだが、それがなんであるか吉治には分らなかった。

「惣右衛門さんは幾つになるかね」

甚三郎が云った。やっぱり佐藤惣右衛門の手紙のことが気になるのだと吉治は思った。

「今年、二十歳か二十一歳でしょう、私より、十歳は下ですから」

「すると、おれよりは二十二も下ということになる」

甚三郎は笑った。

「あなたは四十二歳、そうは思えませぬなあ」

吉治は云った。自分より三つ四つ上ぐらいに思っていたからだった。

「その錦織の佐藤惣右衛門さんはあなたの親戚ですか」

話がまたもとに戻った。いやそうではありませんと吉治は否定してから、

「たしか、彼がカナダへ行く前の年のことです。私は錦織の親戚に頼まれて、炭焼きの手伝いに行つたことがあります。鱒淵川の上流に向つて登り左側の沢に入つたところですよ」

吉治は話し出した。

季節は晩秋で、初雪にはまだ間がある頃だった。後藤吉治の炭焼竈すすりかまから声を掛ければ届くほどのところに、佐藤惣右衛門の家の炭焼竈があつた。乾いた日が十日も続いた後のことだった。惣右衛門のけたたましい叫び声を聞いた吉治がそつちを見ると、惣右衛門の竈の外で炎が見えた。

(失火だ)

と吉治は咄嗟とつさに判断すると、自分の竈場の入口に用心のために置いてあつた、青松葉の枝を持って駆けつけ、その火を叩き消した。野火は、青松葉の枝で叩き伏せるのがもっとも効果的だった。佐藤惣右衛門は若かつたのと、あまりにも急なことなので、袴はかま天を脱いで火を消そうとしていたのである。しばらく晴天が続き、あたりが乾燥していたがためにこのようなことが起きたのであつた。後藤吉治が駆けつけるのがもう少し遅かつたならば、大きな山火事となつたかもしれない。佐藤惣右衛門はその後カナダに渡つたが、折あるごとに後藤吉治のところに手紙を送つて来ていた。

「そうでしたか、知りませんでした。小さい村の中にも、いろいろなことがあるものですね」

甚三郎はそう云つてから、にわかに立ち上つた。吉治や妻のせつがいくら止めても、他に約束があるからと云つて聞かなかつた。彼はそこに出来た金平の頭を撫でながら、

「坊やも大きくなつたらカナダへ行くか。そうだ、この小父さんが坊やをカナダへ連れて行つてやろう」

と云つた。

金平は甚三郎の顔を見上げていた。暴れ馬を取り押えるほどの強い人なのに、なぜあのようにやさしい目をしているのだろうかと思つた。彼は甚三郎が去つたあとも、しばらくそこに坐つていた。甚

三郎が背にしていた柱の釘に暦がかかっていた。金平は暦の表に書いてある明治二十九年（一八九六年）の文字を何時までも眺めていた。

*

登米郡米川村は宮城県北東部の岩手県との境にあった。北上川の支流二股川周辺に開かれたごく狭い盆地に人家が点在し、周囲は山また山であった。

明治二十九年、当時東北本線は通じたばかりだったが、米川村から東北本線石越駅までは歩いて四里（十六キロ）、そして西郡街道を峠越えして東方に向えば、やはり四里のところに海があった。交通は、歩いて石越に出るか、北上川を船で石巻に出るかどうかだった。

及川甚三郎は思いついたら、それをしないではおられない性格だった。その日は馬頭観音堂の大祭日であったが、狼河原の後藤吉治から聞いた話の真否を確かめるまではじっとしてはおられなかった。

錦織村芝山は西郡街道を二股川に沿って南に下り、二股川が北上川と合流するところにあった。鱒淵とは僅か一里（四キロ）しか離れてはいなかった。

錦織村芝山の佐藤惣右衛門という名を聞いたとき甚三郎は、その人こそ、噂に聞いている佐藤甚右衛門の次男に違いないと思った。甚右衛門は甚三郎より三歳上で、もともと鱒淵から錦織の佐藤家へ養子に行った人だった。甚右衛門のせがれが二、三年前に十八歳の若さでカナダへ渡ったという噂は聞いていた。

甚三郎は甚右衛門に会って、佐藤惣右衛門が後藤吉治に出した手紙の内容について、聞きただしてみたいと思った。きつと同じような手紙が、父の甚右衛門のところにも来ているだろうと思った。

狼河原から鱒淵の自宅に立ち寄って錦織の芝山へ行こうと思ったが、大祭で道が混雑しているか